

天台開会思想と本化地涌菩薩との関連②

—— 応生眷属の利益 ——

山 内 寛 久

前回（印仏研五十二卷一号所収）では天台智顗が法華經を中心とする円教教理より法門化した開会思想に注目し、応生眷属の代表格である本化地涌菩薩の本質が、この開会の法門と密接な関係にある事を検証した。この基礎的研究を踏まえ、本稿では応生眷属の化他行と、化他を被る衆生に焦点を当て両者の関係とその構造について考察してみたい。

考察の前に先行する近年の研究論文・著述の主要なものを挙げてみると、原始天台に基準を置く立場から開会（殊に相對種開会）を論じたものに安藤俊雄著『天台学根本思想とその展開』同著『天台性具思想論』があり、天台思想史、日本仏教史の中で哲学用語などを用い諸々の視点から多角的に開会について論じているものに田村芳朗著『鎌倉新仏教思想の研究』同著『日本仏教論』所収「善悪一如」などがある。また日蓮教学の立場からは、浅井円道著『日蓮聖人と天台宗』所収「法華經の開会思想」。「円教」の意味。渡辺宝陽編『法華仏教の仏陀論と衆生論』所収渡辺宝陽稿「日蓮聖人の

仏種論」。浅井円道編『本覚思想の源流と展開』所収渡辺宝陽稿「煩惱即菩提」覚え書き」。原慎定著『日蓮教学における罪の研究』第六章、第四節・敵対相即の論理、などがある。^①浅井・渡辺・原三氏に共通する点は、智顗が法華円教教理より法門化した相對種開会の論理を検証し、これを日蓮が歴史社会の現場で具現化したと論ずる所にある。渡辺・原両氏における開会の概念の基礎的考証は、先の安藤氏の研究を全面的に受けたものといえる。浅井氏は安藤氏の研究には言及していないが構造的には同じ内容となっている。安藤氏は天台教学の底に相對的に相即する開会の論理が一貫して流れている事を指摘し、その構造を『法華玄義』迹門十妙中、仏果を直接的に説く第五「三法妙」に依って究明している。

本稿（前稿も含む）は上巻の研究の一端を埋めるものであるが、従来あまり詳細に論じられてこなかった『法華玄義』迹門十妙中、眷属妙、功德利益妙に焦点を当て化他の能所の関係から智顗が説く地涌菩薩の本質を検討している点に少しく

特色を有するものである。⁽²⁾

『法華玄義』迹門十妙の第十功德利益妙では、仏と衆生の感応、諸仏の神通、説法による化他の力用、四種（業願通應）の眷属とその眷属の利益についての必然的連関を示し、この四種眷属の利益を正説の利益を明かす段において「遠益」（大通仏から今番釈尊出世までによる利益）「近益」（釈尊在世中、法華經以前の諸經による利益）「当文の益」（法華經の利益）の三面から明らかにしている。遠益では、二十五有・藏教・通教・別教・円教の利益を十種に分けて説明し、近益では相待妙判の立場から諸經と法華經の利益に浅深、勝劣の差別を立て、前三教を僦益、円教は妙益であると示し、当文の利益では諸經の僦益も法華經に入れば無作の妙益にほかならない事を明かし絶待妙判の立場から説明を施している。

そこで、先ずはじめに、遠益八番円人の利益を明かす段をみてみたい。

八番^ニ円人ノ益^ハ者此^{レハ}是^レ修シテ三諦一実ノ理^ヲ一ニシテ念^ヲ法界ニ繋グ縁^ヲ法界ニ若シ歴^{シテ}縁^ニ対^スレニ境^ニ攀足下足無^ク非^ニザルコト道場ニ其心念念^ニ与^ニ諸波羅蜜ト相応シ修シ四三昧ヲ觀ス十種ノ境ニ可発閑宜^{アレバ}聖人赴^ニ対応シ之ニ豁然トシテ開悟ス或ハハ真^ニ得^ニ冥顯ノ両益ヲ此^{レハ}是^レ円^ニ用^ニテ二十五三昧ヲ円^ニ加^{シテ}破^ニ二十五有ヲ顯^ニ出^{シテ}我性^ヲ得^ニ究竟実事ノ之益^ヲ也。（『天台大師全集』以下『天全』と略称。四卷二六九—二七〇）

即ち、円教の修行者の利益は初心から三諦円融の一実諦の法を修し一念一念を仏法界の中道実相理の意に合わせ法界全体にひろげて繋ぎ止どめる。したがって日常のどのような所であつても中道実相の理を修する道場でない所はなく、その動作言語する心の一瞬一瞬が菩薩行と結びつく。それは自ずと四種三昧を修し、十境界を觀ずる事となるという。また、微かに円教に相應しい善を生じようとする修行者があればこの修行者はほどよい時に聖人（聖位の菩薩及び仏）の慈悲に關かる事になる。聖人も宜しきに随つて修行者に応じ冥顯の両益を与える事で修行者はにわかに悟りを開き、相似即もしくは分真即の利益を得る。これは修行者と聖人、両者の感応によるはたらきかけによつて成就するのであり、その内実は相對的相即の円融の理に基づき二十五三昧を用いて二十五有を破す事によつて二十五有本来の性である仏性を現し出し、悟りの究極的境地の眞実の利益を聖人は与え、これを修行者は修する事で得る、というものである。

八番円人の益とは相似即十信までの無明未斷の凡位における利益といえるが、円教は円融相即の一実諦を説く教であるから上述の内容は結果的に十番実報土の利益の特質を直接的に説いているものと推察できる。この点、以下検証してみた。

「遠益」では、二十五有の果・因の利益、藏教の声聞・縁

覺・六度の菩薩の利益の説明の一々に「衆生」の「宿世ノ善根」「先世ノ善根」による「可発閑宜」に「聖人赴ニ対応ニ之」して「獲ニ冥顯ノ両益ニ」等の表現がみられる。また通人の益と別人の益では上記の文は見当たらないが、「総別ノ慈悲例ス前ニ」という表現をもつて同じ内容を示している。そこで、いままで述べてきた利益と共通し、さらにその様相を示していると思われる二十五有果報の利益を締め括る以下の文をみてみたい。

此ノ清凉ノ益ハ合シテ而言レバ之ヲ蓋シ由ル凡聖ノ慈善根ノ力ニ別シテ而言レバ之ヲ本ト由下菩薩初メ觀ニ二十五有所防ノ之惡一而起ニ於悲ヲ觀ニテ二十五能防ノ之善一而起ニ於慈ヲ以テ此ノ慈悲ヲ熏ニ王三昧ニ不レ捨テ衆生ヲ赴對閑宜シテ令ムレ得ニ利益ヲ大經ニ明ス二十五三昧破ニトヲ二十五有ヲ者（『天全』四卷二四二）

即ち、二十五有果報の冥顯の両益を所化の凡夫と能化の聖人との関係において示すならば、まさしく凡夫の慈善根（感）と聖人の慈善根（応）の力による利益といえるが取り分けて實際を明らかにした場合、菩薩は、迷いの衆生に惡を防ぐはたらき（即空即仮即中の善）⁽⁴⁾がある事を詳らかに観じる事によつて慈悲の用きを起こすという。そしてこの慈悲によつて中道王三昧に熏じて衆生の機感の応じ、生ずき善を生ぜしめ、冥に顯に利益を得させるといふ。またこの内容は涅槃經の二十五三昧によつて二十五有を破すという説示の教理的根拠と

もなっている事を明かしている。二十五有果報の利益が最下の四惡趣を含む果報の利益である点に着目しておきたい。

そこで、先の円人の利益と、いまの二十五有果報の利益を念頭に置き、『法華玄義』行妙段、慧聖行の無作の四諦の慧を明かす項の以下の一文をみたい。

得レテ入ニ此ノ地ニ具シ二十五三昧一破シテ二十五有ヲ顯ハス二十五有ノ我性一我性ト云ハ即チ仏性一開キ之知見ヲ發シ真ノ中道一斷ジ無明ノ惑ヲ顯ニ眞心ニ身一縁感スレバ即チ應ニ百仏世界ニ現ジ十法界ノ身ヲ入テ三世ノ仏智地ニ能ク自利他利スル眞実ノ大慶ヲ名ク歡喜地ト也此ノ地具ニ足ス四徳一破ニ二十五有ノ煩惱ヲ名ク淨ノ常樂我淨ヲ名ケテ為スハ仏性顯一即チ此ノ意也（『天全』三卷一〇七一〇八）

この文によつてこれまで述べてきた、円人の利益、二十五有果報の利益などの一切の自利、利他も行位の立場からいえば歡喜地（聖位）に入る事でくまなく發揮されるという事が理解できる。したがって先に述べた円人の利益の説明が聖位に住する十番実報土人の利益を直接的に説いていると推察した事も首肯できてくる。また実報土人の利益を端的に説いている円人の益の項に明かされた利益こそが、最下の四惡趣を含む二十五有の被むる利益である点に注目したい。

円教とは上限の菩薩を対象とした教であると共に一方では円教が本来の真理（妙）を顯すため、この円教を受持体得する菩薩の利益は最下の衆生にも及ぶ理となる、即ち、実報土

人は最下の衆生と積極的に関わる事で自他の無名を克服し中道を増進する。そして無明は中道増進の資となる事で中道と相即し、転じて明となる利益を被むる。これが応生眷属の功德と利益の構造である。

ここで素朴に、円教を受持する応生眷属の利益が最下の衆生にまで及ぶのならば、取り分けて蔵通別三教を設ける必要はないのではないかという疑問も起こり得る。この点、智顗は、実報土人の化他による利益を諦め括るにあたり、以下のように説く。

生ニズル方便ニ者ハ、雖モ説ク種ノ道ヲ其ノ実ハ、為ニ一乗ノ亦タ皆令レ得セ至ニ宝所ニ受テ法性身ヲ而於彼ノ国ニ被ル弟九番十番、真実ノ利益ヲ如キ二千世界ノ微塵ノ菩薩ノ即チ其ノ流也（『天全』四卷二八七頁）

即ち、化他を施すべき土に生じて前三教を衆生の機限によって種々に分けて説いたとしても実際は円教一仏乗の利益を引き出すためのものであり、結果的には円教を持つ実報土人の化他の利益は一切の衆生を真実の涅槃に致らせるという。さらに、実報土人はこの化他行によって淨六根相似解の道を増進し、あるいは分真即初住位に進入する利益を被る、と説く。ここでまた素朴な疑問が起る。即ち、地涌千界とは、すでに聖位に入った応生眷属の事をいうのであるのに、いまだうして化他行によって相似位を増進し分真位に入る利益を被

るという解釈を施すのであろうか。それは周知の通り「遠益」の釈が法華経迹門の化城喻品に基づき、大通智勝仏の時から今番釈尊出世までの利益に当てはめて論ぜられている所に起因する。即ち、遠益十番実報土人の益を明かす項に「久遠之言ハ実ニ杳漫ニシテ而未レダ顯ニ本地ヲ」（『天王』四卷二八四）とあるように、久遠とは、はるかに遠い事をいうのであって、その具体的様相は実に顕しがたいゆえに、迹を借りて本を知る意をもつて「第三云ッ宿世ノ因縁吾今當ニ説ク」（『天全』四卷二八四）として明かされる化城喻品の説を借りて、すでに無生法忍を得て久しい本時の応生眷属の具体的利益を表明しているものとみられる。

最後に、流通の益を明かす段の以下の文を挙げて考察を締め括りたい。

弘經ノ行人具ニ通ニ凡聖ニ若シ法身ノ菩薩ノ誓願モテ莊嚴ス令ム此土他土下土上土ヲシテ得セ二權実ノ七益九益十益ヲ化ノ功帰シテ已ニ還テ資ケテ法身ノ増進損生ス也（『天全』四卷三〇四）

よつて、本地地涌の菩薩とは、二十五有の衆生及び二乗、さらには通教・別教の權大乘の菩薩等、法界を包括した一切の衆生を仏と共に利益を施す応生眷属である事が理解できた。殊に、応生眷属が、最下の惡と関る事で、自身の善（中道）を増進し、惡は善を増進する資となる条件を経て即善と開會される。ここに開會を実践する化他の能所の關係構造の一端

天台開會思想と本化地涌菩薩との関連②（山内）

をすることができるのである。

1 その他、勝呂信静著『法華経のおしえ日蓮のおしえ』第二部日蓮のおしえ・日蓮聖人における「開會」の思想の展開。があるが、これは日蓮の初期の遺文に視点を置き日蓮の開會思想を論じたもので、天台智顗の教学にまで遡源して述べられてはいない。

2 本化であるから本門十妙の解釈によるべきと考えられるが、本門十妙では結論だけ述べられ具体的内容の説明は述門十妙に譲っているのが『法華玄義』のしくみなので述門十妙に立脚し考察を試みた。

3 『天全』第四、二六七頁。また湛然の『法華玄義釈義』では「言フハ総別ノ慈悲ト者例セバ如シ前ノ文ノ前ノ文ニ云ヘルモノ合シテ而言フ之ヲ即チ是レ総也別シテ而言フハ之ヲ即チ是レ別也亦タ是レ通別ナリ通シテ以テ慈悲ヲ用テ二十五昧ヲ加ス之ニ別トハ者若シ令レムル伏セ見思一時用テ菩薩ノ本ヲ初ニ自ラ伏スル見思中ノ慈悲弘誓ヲ熏ス之ニ若シ令レムル入ラ空ニ則チ用テ菩薩ノ本ヲ初ニ修スル空ニ時慈悲弘誓ヲ加ス之ニ仮中準シ此ニ思フ之ヲ可シ知ル。『天全』第四、二六七頁を参照した。

4 『法華玄義』感応妙。「論ズレバ善ヲチ有リ白業ノ善即空ノ善即仮ノ善即中ノ善」是レヲ名ク地獄ノ機ト也。『天全』第四、四七頁。感応妙は仏と衆生の因縁を説いたものであるが、構造としては本稿の内容である応生眷属（本化地涌菩薩）と衆生の因縁関係と一致するので解釈の参照とした。

5 『法華玄義』本門十妙、第七本眷属妙「從ニ本時ノ寂光ノ空中一出ス今時ノ寂光ノ空中一今時ノ寂光ノ空中ノ者ハ不レ識ニ本時ノ者一

故ニ言ク我レ經ニ遊シテ諸國ニ乃チ不レ識ラ一人一入地涌千界皆ナ是レ本時ノ応眷属也。『天全』第四、四四〇頁。『法華玄義釈義』「涌出ノ菩薩ハ得忍已ニ久シ是ノ故ニ迹中ニ始メテ近ク入ル者ハ不レ識ニ久キ者」。『天台』第四、四四一頁。参照。因みに智顗が説く寂光土には上中下の三種の意がありいまの本眷属妙釈における寂光土とは実報土と実質的に同じ中下の寂光土であると理解できる。『維摩羅詰經文疏』卷一仏国品釈、「若シ分ニ明ニ常寂光土ヲ下寂滅忍ハ十地ニシテ有ニ二生在ルコト中寂滅忍ハ等覺地ニシテ有ニ一生在ルコト也（中略）妙覺ハ永ク尽ク故ニ言フ一人ノ居ニ淨土ニ也」を参照。智顗の四土（凡聖同居土・方便有余土・実報無障礙土・常寂光土）に関する最近の論稿を挙げると、大久保良峻著『台密教学の研究』第四章『維摩經文疏』の教学―仏についての理解を 中心に―。田村完爾稿「天台智顗撰『維摩經疏』における「仏国因果」の一考察」（『佐々木孝憲博士古稀記念論集』同稿「常寂光土について―天台智顗の解釈を中心に―」）『仏教学論集』第二三三号立正大学大学院研究会）などがある。田村完爾氏の論稿には近年に遡る研究史が記載されているので参照されたい。

（キーワード）実報土人、利益、化他行

（立正大学大学院修了）

In the history of the subsequent Nichiren religious group, the term was interpreted variously. The opinion influenced by the interpretation of Japanese Tendai sect is also in it.

20. 'Denpō-shōja-ketsuryaku' as the Idea of *enmitsu-itchi* in Taimitsu: On Annen and Ninkū

Hiroshi TSUCHIKURA

The idea of *enmitsu-itchi* 円密一致 [The identity of the essential purport of the Perfect Teaching of Tendai and Esoteric Buddhism] is the basic position of Taimitsu 台密. There are two types of *enmitsu-itchi*: one is the idea of *ridō-jii* 理同事異 [The Perfect Teaching of Tendai is identical to Esoteric Buddhism in principle, but in practice each one is different], the other is the idea of *ridō-jidō* 理同事同 [The Perfect Teaching is identical to Esoteric Buddhism in both principle and practice]. Most centrally, Annen 安然 (841-898?) and Ninkū 仁空 (1309-1388) emphasized the idea of *ridō-jii*, and secondarily the two scholars referred to the idea of *ridō-jidō* too. The two scholars adopted 'Denpō-shōja-ketsuryaku' 伝法聖者闕略 as the idea of *ridō-jidō*, meaning "When the Buddha preached the practice of the three mysteries (*sam-mitsugyō* 三密行) Denpō-shōja 伝法聖者 listened to the Buddha preach in his presence. But they could not record the practice of the three mysteries in a sūtra (*ketsuryaku* 闕略), because their faculties were not mysterious." Particularly Ninkū frequently referred to 'Denpō-shōja-ketsuryaku', and he constructed the idea of *enmitsu-itchi* much more solidly.

21. The Tiantai Doctrine of Kaihui (開会) and Benhuadiyong Bodhisattva ②

Kankyū YAMAUCHI

In this paper I would like to consider the cultivation of Yingsheng juanzhu and all living things that receive it, and the structure and the relationship of the two.

First, I would like to draw attention to the fact that in *Gongde liyi miao* (功德利益妙), the tenth of the ten categories of *Miao* (妙) of *Jimén* (迹門) described in the *Fahua xuanyi* (法華玄義), it is indirectly written that the profits of perfect teaching *Yuanjiao xiangsi ji* (円教相似即) are equal to the profits of *Shibaodu-ren* (実報土人), and at the same time, are also equal to the profits of *Ershiwuyou* (二十五有), including the lowest hell.

Next, quoting a passage from *Xingmiao* (行妙) in the *Fahua xuanyi* in which the *Wuzuo sisi* of *Huishengxing* (慧聖行) is described, I will state the relation and structure of *Yuanjiao xiangsi ji* and all living things that receive it, showing that by entering *Huanxidi* (歡喜地), the above-mentioned profits of perfect teaching *Yuanjiao xiangsi ji* show the full extent of their abilities.

The perfect teaching is a teaching for superior bodhisattvas; but on the other hand, perfect teaching is a sufficiently great teaching to help those in the lowest level of hell.

Therefore, by actively relating to the lowest level of beings, *Shibaodu-ren* conquers his ignorance, helps the promotion of the Middle Way, ignorance and the Middle Way are tied together, and there is an increase in the power to take away *wu* (無). This is the structure of profits and merit of *Yuanjiao xiangsi ji*.

22. The Authenticity of Zhanran's *Fahuajing dayi* (*Outline of the Lotus Sutra*)

Hideyuki MATSUMORI

This text was composed of three sections, “Outline of the chapter of the Lotus Sutra”, “Interpretation of the chapters’ names”, and “Analytical division of the *sutra*”. Even though there have been several researches on this issue, the problem has not been resolved.

In this paper, I consider the concept of “the five natures” in the first section, the characteristics of the interpretation of the chapters’ names of the second section, and the difference between the analytical division of the *Fahua wenju* and that of the third section.